

## 7 夜想曲集

老歌手

### 1 構成

行間を開けた箇所が二箇所あるので1～3段として扱う。

1

時 場所 ある朝 ベネチア 春

事件

冬中、カフェの奥で縮こまって演奏していたのが、外の演奏で明るく浮き立った。広場を歩き回り助っ人の口を探して三つあるカフェバンドのどこでも演奏する。観光客に交じって座っているトニー・ガードナーを見た。

時 場所 サンマルコ広場

事件

カフェ支配人は演奏だけで口を開くな、そうすれば外国人であることが分からないからと言う。知っている曲を聴きたいだろうと過去のヒット曲を演奏する。昨年《ゴッドファーザー》を一日九回演奏した。

時 場所 ある春の朝

事件

観光客に交じって座るトニー・ガードナーを見かけ本当に感動した。

時 場所 トニー・ガードナー

事件

ポーランドが共産主義でレコードの入手など難しかった時代、母はガードナーのレコードを全部集めていた。

時 場所 ワルシャワ

事件

私はワルシャワで働くようになり、闇市でレコードを買い、母のレコードを三年以上かけ全部入れ替えた。

時 場所 プログラム終了

事件

演奏しながら見続けたガードナーのテーブルに向かった。彼は振り向いて見上げた。自己紹介すると、共産主義の国からでは大変だったろうと言うので、今は民主主義の国と答える。母が気に入っていたと話す。

時 場所 『比類なきトニー・ガードナー』

事件

アルバムの名前を忘れていて彼は答えた。

時 場所 五十からみの端正な容姿の女性

#### 事件

ガードナーは妻リンディを紹介する。ヤングヤネク呼ばれていると言うとニックネームが本名よりも長いと言う。ガードナーは無礼はいけないと言う。アコーディオンだろうというのでギタリストと答える。ガードナーは無礼だと怒気を帯びた声を出す。

時 場所 リンディ去る

#### 事件

ベネチアのミュージシャン暮らしのことなど話したがガードナーは上の空のように見えた。

時 場所 潮時

#### 事件

立ち上がろうと身構えるとガードナーは突然こう言った。リンディと初めてベネチアに来たのは二十七年前ハネムーンで思い出が沢山ある。その一回だけだ。結婚記念日かと言われるとあっけにとられた表情でいた。

時 場所 母が聞いていた歌。

#### 事件

女に去られた男が強がり自虐的に大きく笑う歌を思い出した。

ガードナーはセレナーデを聞かせてやりたい、ギターを弾いてほしい、ゴンドラに乗り三曲か四曲だ、今夜八時半頃ゴンドラは用意すると言う。六十男と五十女の夫婦が恋する十代の若者のようにふるまう。

時 場所 数分間

#### 事件

二人は細部を詰めた。

時 場所 プログラムの時間

#### 事件

私はテントに戻った。

時 場所 街灯の下

#### 事件

私は数分遅刻した。ガードナーは立っていた。数分間がなんだ、リンディと二十七年間連れ添ったと言う。

時 場所 ゴンドラ

#### 事件

船頭ビットーリオは表では友人然とふるまい、裏で悪口を言う。出来立てほやほやの国から来た外人と言う。

時 場所 ゴンドラ 低い橋

#### 事件

ガードナーは物思いにふけていた。リンディは《恋はフェニックス》が好きだったと

言う。母はシナトラよりあなたの方がいい、グレン・キャンベルよりいいと言った。あれを弾けるかと言うので数小節弾いて見せた。Eフラットまで上げろと指示する。歌い始めた。美しく聞こえた。

時 場所 あのアパート

事件

母がトニー・ガードナーのレコードを聞いていた。

時 場所 ガードナーの声

事件

《フェニックス》、《惚れっぼい私》、《ワン・フォー・マイ・ベイビー》で十分だ。そう言う物思いに沈んでいる。サプライズか聞くとそうなるだろうと思うがどう反応するかわからないと言う。

時 場所 角を曲がる レストラン 笑い声と音楽

事件

トニー・ガードナーが乗っていたと知ったらどうしたかと言うと、君は共産圏の出だから疎いと思うと言う。もう自由の国と反論する。

過ぎ去った時代の老歌手を見ただけだとガードナーは言う。わたしは信じられない、シナトラやディーン・マーチンと同じだと言う。親切な言葉だ、ありがとうと礼を言う。わたしは何か面倒なことに巻き込まれたのではないかと思う。ビットーリオは変な野郎を乗せちまったと言う。

時 場所 ミルウォーキー いい豚肉

事件

客はうまい豚肉を食っている。ガードナーはリンディのために歌う。女房のことを少し話そうと言う。

2

時 場所 二十分 ゴンドラ

事件

ガードナーは喋りつづけた。リンディはミネソタ州の小さな町に生まれた。映画雑誌ばかり見ていた。遠大な計画があった。十九才でカリフォルニアまでヒッチハイクした。

時 場所 ハリウッド ロサンゼルス郊外 食堂

事件

若い娘たちは野心満々でひっきしなしにつめかけた。目標はスターとの結婚だ。メグは四十女でウェイトレス仲間の姉御役、助言者だ。望みがなかった娘らをじっと見ていた。何人か成功し、大多数が失敗した。

時 場所 六年後

事件

リンディは六年後にチャンスが訪れた。

時 場所 ラスベガス

事件

ディーノ・ハートマンと結婚した。彼はゴールドディスクも何枚かある。結婚しても野心を持ち続けた。妥協せず弱気にならなかった。

時 場所 ペントハウス

事件

リンディを一目見て虜になった。光り輝くスターになっていて、ディーノは輝きを失っていた。

時 場所 ラスベガス

事件

結婚しロンドンに行った。居間でメイドが《惚れっぽい私》を歌い、それを二人で聞いていた。だからこの歌をやろう。

時 場所 通り過ぎたレストラン ゴンドラ

事件

私が奥様とうまく行っていない、母もよくふさぎこんでいた、落ち込むたびにあなたのレコードをかけて歌い慰められたと言うと微笑んだ。リンディは今部屋で電気がついていると答える。わたしは全力でやる、どんな夫婦にも危機はあると励ます。

3

時 場所 パラッツォ 三階の窓

事件

ビッターリオは同じところを回った。漕ぐのをやめた。ガードナーはリンディを呼んだ。リンディは誘拐されたと心配した。メモがあったろうと言うとみていないと言う。タバコを買うとかが普通のメモと言うとタバコを買っているのと聞く。歌を捧げようと思ったと言うと冗談、寒いと中に入る。

時 場所 《恋はフェニックス》

事件

私はそっと弾き始めた。母に分かるように弾いた。彼女は歌い始めた。昔のままの声だ。

時 場所 《惚れっぽい私》

事件

次だ。ガードナーの伴奏は初めてだ。何とかやりおおせた。何度も窓を見上げたが夫人の気配は感じられない。

時 場所 《ワン・フォー・ベイビー》

事件

歌い終えた。夫人がすすり泣いていた。ガードナーに喜ぶ様子がない。向こう側につけてくれと言う。なんとなく私を避ける。三曲は夫人にとってつらい歌ばかりではなかったのか。

ガードナーはリンディは歌うのを聞いて喜んで悲しんだ。私も同じだ。旅行の後、別れる

と言う。私は分かれる前まで仲良くいられる夫婦は多くないと言う。

時 場所 ビットーリオ波止場にかかる 二人ゴンドラに座る

事件

ガードナーはリンディに一目ぼれした。私はスターだ。リンディにはそれが全てだ。愛の到達点だ。今、ビッグネームでない。静かに消えていく。私は若い女に目をつけて向こうも私に目をつけている。別々の道を歩むのが最善だと結論に達した。リンディは若く美しい。前に出ていく。

時 場所 ゴンドラ波止場にぶつかる

事件

ガードナーはビットーリオに多額の金を、私に分厚い札束を渡す。

時 場所 数ヶ月 秋のある日

事件

離婚した。

## 2 舞台

ポーランドは一九八九年社会主義政権から自由選挙により自由主義政治体制に転換した。この頃のイタリアベネチアに展開する。

## 3 人物

### (1) トニー・ガードナー

トニー・ガードナーは老歌手だ。若い時有名だったが年を取り昔ほどでなくなっている。妻リンディとベネチアを旅行している。サンマルコ広場で観光客にまじって座っている。私の母はガードナーがお気に入りですべてのレコードを全部持っていた。私が子供の頃動き回って破損したら怒鳴りつけた。ワルチャワで働くことになり、闇市でレコードを買いすっかり入れ替えた。

私はカフェバンドのギタリストで演奏しながら見つめ続けた。プログラムが終了するとテーブルに向かった。自己紹介すると、共産主義の国からでは大変だったろうと言う。今は民主主義の国だと訂正する。レストランの客が、ゴンドラにトニー・ガードナーが乗っていたと知ったらどうしたか問うと共産国の出でこういうことの事情は疎いと言うので、共産主義の国ではないと否定する。

妻リンディが私のニックネームとネームについて語ると無礼だと叱る。アコーディオンを弾いていると言うと無駄だと叱る。他人の前で、リンディは二度夫から注意され不快になる。彼は些細な言い回しにこだわる。二人の間はうまくいっていない。

ベネチアのミュージシャン暮らし、カドリバンドの話を半ば上の空で聞いている。ベネチアにガードナーは二十七年前新婚旅行で来た。今回は二度目だ。私は結婚記念日かと問う。それは普通だ。が、そうではない。よりを戻すためだ。このことをヤネクには言わない、言わないからヤネクはこの後の提案をロマンチックととらえる。

ガードナーの提案はリンディのいる部屋の窓の下でゴンドラからヤネカに演奏してもら

いリンディの好きな歌を歌うことだ。昔ヒットした曲だ。それをロマンチックに歌う。そうして昔に戻る。昔を取り戻す。六十男と四十女夫婦が恋する十代の若者にワープする。夢のような仕掛けだ。が、陳腐だ。空疎だ。通り一遍の発想が、経験を積んで来ている筈の（少なくともリンディは）人が感動する仕掛けではない。むしろ十代二十代のカップルなら、感動させただろう。この企画はリンディに話していないサプライズだ。

ガードナーは状況が分かっていない。しようとしていることの意味を把握していない。私の出生について二度指摘されても受け入れていない。

ガードナーは過ぎ去った時代の老歌手と思って分からないと思っている。

ヤナクは最高だ、シナトラやディーン・マーチンと同じだと称える。母が好きで、子供の頃から聞いている曲だ。それを歌った歌手が目の前で歌っている。感動し尊敬する。

ガードナーは有名な歌手になり、リンディと知り合い結婚した。リンディはディーン・マーチンが有名になった時、結婚した。ガードナーが下り坂になると気持ちが離れた。ガードナーはディーンと同じ待遇を受ける。

ビットリーオは同じ所を回る。三階の窓に明かりがつくのをガードナーは待っていた。

あかりがつくとガードナーは声をかける。二人のやりとりはちぐはぐだ。話が通じない。

ヤネクのことでも無礼と叱ったが、ここで相互に話は進まない。こういうやりとりをこういう生活を続けてきた。懐かしい歌を歌って復活する間柄ではない。

ヤネクは伴奏をやり通した。ガードナーは選んだ三曲を歌い終えた。リンディはすすり泣いた。喜んでいる様子もない。

彼は企画に失敗し失望する。考え抜いた劇的な計画は消滅する。

彼はリンディをまだ愛している。ビッグネームでない自分を捨て去っていく。よりを戻せなかったがリンディへの思いは続く。まだ結婚できるリンディを離し、結婚させようとする。身を引き自由にさせる。

リンディは彼が有名だったときは愛したが、落ち目になると離れた。彼はリンディに一目惚れし愛した。一人を愛し続けた。リンディの愛がなくなると、歌で引き止めようとした。失敗すると自由にした。自由になって幸せになることを望んだ。歌の道と一緒に愛を一筋に生きた。

## (2)リンディ

ミネソタ州の小さな町に生まれた。勉強をそっちのけで映画雑誌ばかり見ていた。十九才でカリフォルニアまでヒッチハイクした。ハリウッドまで行きたかったが、ロサンゼルス郊外の道路沿いにある食堂でウェイトレスをやった。小さな食堂だった。

ここに野心満々の娘達が十数人集まって何時間も喋った。目標はスターとの結婚だった。

六年後にチャンスが訪れた。歌手のディーノ・ハートマンと結婚した。リンディは結婚しても野心を持ち続け妥協せず弱気にもならなかった。ディーノが落ちぶれると光り輝くスターのガードナーと結婚した。まもなく二人はロンドンに行った。

ガードナーが落ちぶれるとリンディは離れた。ディーノの時と同じだ。彼女は勉強しない

で映画雑誌ばかり見ていた。スターのはなばなしい写真だけ見ていた。その俳優を人と評価した。

リンディには、有名であること人気があることだけが価値あるものだった。他の評価は何もない。無礼とかメモとかタバコと言う言葉にだけ反応する。その脈絡はわからない。目に映るものに、それが華麗かどうかだけで反応する。

ヤンとヤネクを音数の違いで判断し、ギターをアコーディオンと取り違える。単純な、理解可能な唯一の判定で判断する。ガードナーを歌手としてその才能で捉える。それが衰えれば去る。

サプライズの演出にもガードナーの歌にも関心を示さない。理解できない。この後もビッグネームの男と結婚し下り坂になると離婚する。

### (3)ヤネク (私)

ギタリストでサンマルコ広場で三つのカフェバンドン属し演奏している。トニー・ガードナーを観光客の中に見つけ興奮する。

母はガードナーが大のお気に入りレコード全部を持っていた。共産主義国だったポーランド人でレコードの入手は困難な状況にあったのに。私がワルシャワで働くことになり闇市でレコードを買いすっかり入れ替えた。

ガードナーを見つけ彼のテーブルに向かい自己紹介した。ガードナーはゴンドラでリンディの部屋の下に行きセレナーデを聞かせてやりたい、ギターを弾いてくれと頼む。

ヤネクは夢がかなった、計画も夢のようなことと喜ぶ。夫婦が十代の若者のように振舞う。ガードナーが共産国と非難するとその都度自由主義の国になったと説明する。

過ぎ去った時代の老歌手と卑下すると、最高だ、シナトラやディーン・マーチンと同じだと称える。

二人の不仲を指摘し、母は落ち込むとガードナーのレコードをかけて歌に慰められたと助言する。

窓に明かりがつくのを確かめ《恋はフェニックス》をさっと弾き始め、アメリカを意識してアメリカを響かせようとした。ガードナーは昔のままの声だ。《惚れっぽい私》もやりおおせた。何度も窓を見上げたが夫人の気配は感じられない。《ワン・フォー・マイベイビー》を歌い終えた。心に届いたと言うが喜ぶ様子がない。

子供の頃特別な人だった。今夜は特別な夜だとガードナーは言う。年とっても歌う力はある。ヤネクはその力を見抜く。二人の別れを惜しむが、彼は考えを変えない。ヤネクは母とガードナーを聞き憧れていた。その人に会い依頼され果たした。優れた歌手と評価する。そして愛していても離婚する理由が分からない。

ヤネクは優れたギタリストだ。ガードナーもそれを認める。ヤネクは音楽家としてガードナーに接する。リンディは評判が低いと判断する。

リンディはディーノからガードナーに乗り換えた。ヤネクの母も男を替えるが出ていかなかった。母の聞く音楽を共に聞いてガードナーに染まった。

降っても晴れても

## 1 構成

行間を開けた箇所が四箇所あるので1~5段として扱う。

1

時 場所 アメリカの古いブロードウェイリング

事件

エミリもぼくも音楽が好きだ。傾向は多少違ったが甘くほろ苦いバラードが好きだった。

時 場所 イングランド南部の大学

事件

こんなジャンルを好む仲間に巡り合えたことは奇蹟に近かった。

時 場所 学生

事件

長髪のヒッピータイプはプログレッシブロックを聞き、ツイードを切るタイプはクラシック一辺倒と別れた。

時 場所 中古店

事件

親の世代の処分したレコードが並んでいた。

時 場所 入学初年

事件

エミリはキャンパスに住み、部屋にポータブルのレコードプレーヤーを買っていた。

時 場所 《わが心のジョージア》

事件

女の名前とアメリカの州名とどっちとして歌った方がいいか？

時 場所 《降っても晴れても》 レイ・チャールズ

事件

エミリはレコードに傾ける愛情は深い。スリムで美しかった。チャーリーは大学で一番の友達でエミリとも彼を通じて知り合った。

時 場所 二年目

事件

チャーリーとエミリは共同で街に家を借りて住んだ。

時 場所 大学以後

事件

ぼくはスペイン、イタリア、ポルトガルでしばらく暮らした。ビルの一室でスペリングのテストをし、会話を繰り返している。チャーリーはテキサス、東京、ニューヨークと飛び回り会議をこなしている。

英語を教え始めてから、ヨーロッパ中にぞくぞく語学学校ができ始めた。低賃金、長時間



労働だったが気にならなかった。

時 場所 八〇年代

事件

日本で教えると大金が稼げるという噂が立った。南イタリア、ポルトガルで教えスペインに戻った。四七才だった。

時 場所 チャーリーとエミリ結婚 ロンドン

事件

名付け親を頼まれたが、実現しなかった。

時 場所 今年の夏の初め

事件

ロンドン行きの計画を立て泊めて貰う。前回訪問では高級ホテル並みだった。寝室がどう改良されているか気になった。部屋は荒れ放題だった。立ちすくんだ。

時 場所 四階建てテラスの上二階

事件

チャーリーのフラットだ。富裕層が住んでいる。

時 場所 小さなイタリアレストラン

事件

チャーリーはロンドン郊外の住人で通る。客は中間管理職だ。彼は頼みがあるという。エミリとの間がごたごたして互いに避けあっている。フランクフルトで会議があり二日後に帰る。泊ってくれ波風をとめてくれと頼む。僕はタイミングが悪かった、お婆のところへ行くと言う。二、三日エミリのそばにいて、面倒を見させればいい、木曜に帰る、それまでに上機嫌にしておいてほしい、帰ってくると仲直りだ。一番の友達だから頼む。お前がいるとエミリはいつも元気になると言う。

時 場所 フラット居間

事件

帰るとエミリは帰っていた。老けていた。ブルドッグだ。チャーリーは旅行のための荷造りをし、二人は目を合わせない。ルームメイトを見つけないが難しいと言う。レイのアパートは一人用だと二人の話に加わり続けた。エミリはそんなアパートはダメだと言う。悪どい語学学校にはこき使われ、大家にぼられ女につきまとわれていると言うと、チャーリーはそういう人種は生き延びる確率は低いとスーツケースを引いて来た。五十になろうって男がまだ若者みたいに振舞うと言うので、まだ四十七だと言うと、エミリはまだが問題だ、能力はあるのに暮らしぶりなんていらいらすると言う。

時

場所 戸口

事件

チャーリーは行くと言って廊下に消えた。僕は手伝うとついて行く。エミリはぼくを嫌っ

ている。三日も一緒にいたらどうなるか。エミリはおれの可能性を信じると言っていた。いかに辛かったか。並の人間なのに、そう思わない。自分を見限っていると思っている。期待が耐えがたくなるだろうと思った。ほかの連中を見てみる、昔の仲間はどうだ、レイはどうしようもない人生だと言う。それでぼくを呼んだのかと言う。

敗残者と言ってない、成功者とは言えない。夫婦の間はぎりぎりのところに来ている。俺は必死なんだ、助けてくれと言う。エミリとは完全には終わっていないと言う。僕はわかった、でもいずれエミリには見抜かれると言う。

時 場所 タクシー

事件

ありがとうと僕の腕をつかんだ。

3

時 場所 フラット

事件

戻るとエミリが態度が変わっていて優しく迎えた。あなたを見ると当時に戻った気になる。何でも言いたい放題だった。今でも昔のままだと思い込む。

時代に取り残された、一押しでひびわれてしまいそうだと言う。今のあなたは昔のレイモンドの抜け殻と言う。

時 場所 数分前

事件

カップを一つぼくの前に置いた。一緒に飲むつもりはないらしい。会議が二つあって出席しないといけないと言う。出かけている間に夕食の支度をすると、慣れないキッチンでストレスがたまる。くつろいでいてと止める。夕食は帰ってから私がやるという。夕食をテーブルに置いた。留守中電話してと言う。

4

時 場所 自分のアパート

事件

一人でいると落ち着かない。他人の家だと安らぎを得る。

時 場所 『マンスフィールド・パーク』

事件

二章読み二十分眠る。

時 場所 午後の太陽 居間

事件

きれいになっていた。CD コレクションを眺めた。

時 場所 キッチンテーブルの上 ノート

事件

エミリの秘密の日記帳でぼくに覗き見させるために置いて行った。

時 場所 居間

事件

本を何ページか読むが、ノートが気になり、キッチンに戻る。

時 場所 キッチン

事件

ノートを開いて見た。立派すぎる備忘録だ。自分の悪口を書いてあるページを握り締める。元通りに戻そうと手で伸ばし続けた。

時 場所 電話 居間

事件

チャーリーはフランクフルトの配車サービスの番号を読み上げてくれと言う。ぼくは馬鹿なことをやってしまったどうしたらいいと聞く。

エミリはほかの男に目を向け始めている。誰だ？成功者の弁護人だ。二人は会っているか。会っていない。彼はエミリなんか目もくれない。じゃよかったじゃないか。

キッチンテーブルの上のメモ帳を見た。どうしたらいい？ページをせっせと延ばせ。

時 場所 電話

事件

チャーリーが落ち着いた声で作戦だと言う。ありのままのお前をエミリに見せてやってくれ。お前が音楽のいい趣味を持っていると思っている。うちに来る夫婦がヘンドリックスと言う犬を飼っていて寄った。犬は写真集をぼろぼろにした。その犬が暴れだして日記帳をかんだと言え。

時 場所 キッチン

事件

数行読んで眠り込んだ。

5

時 場所 電話

事件

世の中はぼく同様のだめ人間ばかりだ。チャーリーは違う。腰をかがめてヘンドリックスの目線で見ると、ヘンドリックスのなり方が足りない。

時 場所 廊下 戸口

事件

いつの間にかエミリが立ってじっとぼくを見つめている。これから会議と言ったのに変だと言うと、あれは助けを求める叫びだったと言う。

時 場所 キッチン 鍋 ブーツ

事件

戸口から覗く。エミリは思いやりに感謝と優しい笑みを浮かべた。

時 場所 傾いた砂糖壺 日記帳

この日記帳から始まったと言うと、ただのメモ帳、心配いらないと答える。

時 場所 居間 ハイファイ装置 サラ・ボーン《ラバーマン》

事件

曲を聞いて解放感と安堵感に浸る。三十年前を思い出した。

時 場所 居間

事件

チャーリーは君に首っ丈だ、今まで以上に愛していると言う。

時 場所 サラ・ボーン

事件

エミリが別バージョンの方が好きだと言うと覚えていたと答える。エミリはチャーリー以外の男はいらないと言う。

時 場所 サラ・ボーン《パリの四月》

事件

とても美しいバージョンだ。エミリがこういう音楽を聞かないなんて信じられないと言う。涙があふれそうになった。

時 場所 テラス

事件

出た。音楽もテラスまで漂ってきた。踊り始めた。エミリをしっかりと抱き寄せた。服、髪、肌の手触りを受け止めた。体重の増え具合を感じた。

エミリはチャーリーはまともな人、やり直さなければと言ひ、ぼくはそうやり直さなければと答える。エミリはあなたは大事な人と言う。

時 場所 一九五四年バージョン サラ・ボーン《パリの四月》

事件

歌が終われば踊ることはもうない。あと数分間安全だ。

### 3 人物

#### (1) レイ (ぼく) レイモンド

エミリもぼくもアメリカの古いブロードウェイリングが好きだ。エミリはアップテンポの曲、ぼくは甘くほろ苦いバラードが好きだ。

中古店には親世代の処分したレコードが出回っていた。

入学した年、エミリはキャンパスに住みレコードプレーヤーを持っていたのでそれを囲み何時間でも聞き、議論した。

チャーリーは一番の親友で彼を介してエミリと知り合った。二年目、チャーリーとエミリは共同で街に家を借りて住んだ。

大学以後、スペイン、イタリア、ポルトガルでビルの一室を借り英語を教えた。教えることは退屈で低賃金、長時間労働に苦しんだ。四十七才でスペインに戻った。

今年の夏の初めロンドンに行き、チャーリーとエミリが結婚し住んでいたアパートに行

く。チャーリーはエミリとの間がごたごたしている、互いに避けあっている、泊って波風を静めて貰いたいと頼む。

フランクフルトで会議があるので、二、三日そばにいて気分をほぐしてほしいと言う。レイが一番の友達でレイがいるとエミリはいつも元気になるからと言う。

二人は学生の時親しかった。二人は結ばれレイが一人残された。

エミリはチャーリーの可能性を信じ昇っていける人と言い続けた。チャーリーはエミリに圧迫され不満を抱いていた。能力以上を期待され潰されそうになっている。この事態を打破してほしいと頼む。

チャーリーは女はいないと言う。エミリは弁護士に目を向け始めているがあいてにはされない。二人の間に異性はいない、浮気によるごたごたではない。

チャーリーが留守の間二人の家にいる。チャーリーと電話でやりとりし実情を知る。二人の間に立ってうろうろし、失敗するレイを見てエミリは感謝する。チャーリーを愛しているレイをいい友達と思う。チャーリーも電話でレイの様子を知り二人の生活を続けようとする。

能力の低い人は懸命に二人の間に立ってやろうとする。

## (2)チャーリー

大学卒業後、テキサス、東京、ニューヨークやらいつも世界中を飛んで回って会議をこなしている。大会社に勤めている。大学二年でエミリと町に家を借り住む。卒業後結婚しロンドンに住んだ。子供はいない。二人の仲はかんばしくない。仲の良かったレオを呼び仲介を頼む。二、三日エミリといて気分をほぐしてほしいと言う。

チャーリーとエミリはレオの仕事に批判的だ。アパートは一人用でルームメートは難しい。アパートを変えろと言う。二人は自分達の生活に満足し、レオの生活を軽く見る。

エミリはチャーリーに多大な期待をかける。逃げ出したい。それでチャーリーは圧迫から押出してくれる女性に憧れる。歯科診療を受け、解放される。他の女性を思っているのでエミリも男に憧れていると邪推する。

## (3)エミリ

チャーリーと同棲し卒業して結婚する。レイとは好きな音楽を楽しむ友達だ。スリムで美しい。

結婚して老け、太った。レイは能力はあるが暮らしぶりはよくないといらいらする。

レイを見て当時に戻った気がする。若かったころを懐かしく思い出す。昔は言いたい放題言った。レイは変わったと思う。今は抜け殻でレイは自分では昔のままと思っている。

エミリは途中で仕事があると職場に戻る。レイは二人の家で一人いて不安になり、一人我点から騒動を起こす。

テーブルの上のエミリのノートを見る。自分の悪口を言っている箇所を握り締めあわて手で延ばし続けた。秘密のノートを見たときパニックになる。チャーリーに相談する。犬があばれたように部屋を散らかせと言う。

帰ってきたエミリはただのメモ帳で心配いらないと言う。

レオはエミリに電話した。エミリは助けを求める叫びと仕事を切り上げて帰る。レオが失敗し挽回しようと努力したことを知る。レオの思いやりに感謝する。

チャーリーはレオが一所懸命やってくれていると感謝する。

レオは二人の生活に入る。頼まれたことをしようとして失敗する。挽回しようと必死になる。二人はレオの誠実さ真剣さに触れ、やり直そうと思う。

レオとエミリの仲は三十年ぶりに音楽を介して復活する。レオとチャーリーはふざけたやりとりを通して復活する。チャーリーとエミリはやり直そうとする。

モールバンヒルズ

1 構成

行間を開けた箇所が四箇所あるので1～5段として扱う。

1

時 場所 春 ロンドン

事件

ぼくはロンドンで過ごした。

時 場所 夏

事件

大学時代の友人としょっちゅう出くわし、嫌気がさした。大学をやめてどうしている、名声、大金は得られたかと尋ねる。

時 場所 オーディション 金庫や改造ガレージ

事件

退屈だったがロンドンのミュージックシーンや音楽業界全般について学ぶことができた。

時 場所 アパート

事件

ぼくはギターを弾いて歌う。連中はジャンルが違うと言う。

時 場所 致命的問題

事件

ぼくのギターは気に入られ、ボーカルもほめられた。が、アコースティックギターがあるだけで移動も歩くだけだ。エレキギターも車もない。もう一つ、自作の曲を歌うことだ。

時 場所 モーバンヒルズ

事件

姉はマギー、夫はジェフデカフェを経営している。夏、姉夫婦の下で過ごすことになる。

2

時 場所 カフェ 夏繁盛 冬休み

事件

マギーは四才上だ。いつもぼくのことを心配している。人手が増えることは喜ぶが給料は払えないと言う。宿泊、食事はみて貰える。仕事はサンドイッチを作ることだ。

時 場所 田舎に来た理由

事件

新しい曲をいくつか書き留めること、秋にはロンドンに戻る。

時 場所 カフェ 朝食後

事件

客の注文がうるさく、十一時まで下に下りて行かない。

時 場所 パーショール

## 事件

ここから数マイルにあるパーショで育った。両親に連れられてこの辺りによくハイキングに来た。ある程度の年齢になると行くことを拒否した。

時 場所 ロンドンから戻ったあの夏

## 事件

美しい所、この土地の人間を故郷と実感した。裏に両親の離婚があった。

時 場所 灰色の家

## 事件

美容院の前に立っているあの家はぼくらの家ではない。この土地は子供の頃のぼくに閉所恐怖を感じさせた。今、美しく見え郷愁を感じさせた。

時 場所 テーブルヒルトエンドヒル

## 事件

モーバンヒルズの北端にある丘でぼくのお気に入りだ。毎朝ギターを持って歩き回った。新しい歌のアイデアが湧き上がってくる気がした。

時 場所 カフェの仕事

## 事件

両親の旧友が何してると質問攻めにし、同級生が大学生口調で話しかけてくる。

時 場所 ミセス・フレーザー

## 事件

パーショの学校でぼくの先生の一人だった。第六学年に進級する前に退職した。最初からぼくを嫌っていた。十一才の時、答えられない質問をし、答えられないと立たせたりクラス的笑いものにした。一四才の時トラビス先生と冗談をかわしクラス全体が笑った。数日後、問題児であることをトラビス先生にも印象付けた。

時 場所 外のテラス

## 事件

婆さんはぼくを覚えていない。お茶とビスケットを買い持って帰る。しばらくして空のカップと受け皿をカウンターに載せ嫌味を言った。昔のままだ。憎しみが一気によみがえり、マギーが下りて来た時、はらわたが煮えくり返った。悪口を言うともマギーは落ち着かせた。

退職した矢先にわかい女に夫をとられた。今朝食を出す民宿を切り盛りしている。ぼくは気分がよくなった。

時 場所 数日後 厨房

事件 ジェフは四十数年連れ添った夫が秘書と駆け落ちした、民宿を始めたが芳しくないと言った。

時 場所 民宿<モールバンロッジ>

## 事件



マギーの仕入れの手伝いで行って見た。

時 場所 客全員の覚え方

事件

特徴を拾い出し、名前を付ける。ティーロとゾーニャはクラウト夫婦になった。ヨーロッパから来た人当たりのいい中年カップルだ。

時 場所 一九一五年当時のこの建物の写真

事件

ティーラは丘の連なりが優しくて人を拒まないと言う。レンタカーで旅をしていてあと三日間いる。ティーロは何か言う度妻を振り返る。ゾーニャはガイドブックを読む。

ぼくはこの女の中では前から思いがたぎってはけ口がなく収まることもないと思う。

時 場所 民宿<モールバンロッジ>

事件

ティーロはホテルを尋ねた。ぼくはミセス・フレーザーの民宿をすすめると、マギーは顔をしかめ横を向く。

夫は礼を言い妻は振り向きもしないで出て行く。ぼくはあの女ならフレーザーの好敵手、二人はここに来ないと言う。マギーは面白がっていればいいけど私はここで生きていく人だからと言う。

3

時 場所 カフェ 静か

事件

ジェフが戻った。ぼくは自室に引き上げ、書きかけの曲の続きに没頭する。

時 場所 午後のお茶の時間

事件

マギーの手伝っての声がかかる。随分仕事した。

時 場所 丘 前の週に見つけておいた場所ベンチ

事件

裏口から出た。聞き手がいるようないないようなものだ。

時 場所 三十七分後

事件

ハイカーが通りかかる。演奏は無料と言うと大きな笑い声がする。クラウト夫妻が引き返してくる。女も明るく笑っていた。ギターを見つめていた。女はギターに合わせて足で拍子をとっていた。居心地が悪くなって演奏をやめる。女は続けてとてもいい曲と言う。ぼくはこの笑顔の女とカフェでもめた女が同一人物とは信じがたかった。女はフレーズの終わりごとに少し下がるところがとてもすてき、とても才能があると言う。男はレコーディングすることになったらプロデューサーに言わねばいけないと言う。

時 場所 ヘレフォードシャー

## 事件

ティーロはこれが望むサウンド、必要な聴覚環境だと言わないと言う。なんだかはしゃぎすぎに見えた。ぼくは二人に好意を持ち始めた。この場所の何かが歌に移って不思議だと言う。

ゾーニャは素敵な音楽、ティーロはいろいろな場所で演奏するので他のミュージシャンの思いに無神経になる嫌いがあると言う。

時 場所 オーディションで最初にやる曲

## 事件

二人は聞こえてくる音を心から楽しんでいる。プロのミュージシャンか尋ねると、ホテル、レストランでデュエットをやるという。二人とも音楽を信じているから演奏するという。

プロでやりたいと言うと、素敵な人生だ、その仕事ができる幸運と思っていると言う。宿は望んだ通りだったと言う。ティーロはいくつもの楽器ができる。聴衆が喜んでくれそうなものをやる。

時 場所 インターラーケン

## 事件

スイスには一年前の夏のインターラーケンに行った。夏の数晩だけ演奏するレストランがある。アルプスの山々を見ながらする。ゾーニャが支配人が民族衣装を着せたと不平を言う。ティーロは制服があつて従業員に着せると言う。ぼくは二人の間に気まずい何かを感じた。

時 場所 デュッセルドルフ

## 事件

ティーロは息子がいると言う。ゾーニャは演奏の仕事があつてそこに行った。着いたと伝言を入れても無言だった。子供を育てながら音楽をやるのは難しいか尋ねると、ピーターは毎日リハーサルを聞かされて育った。祖父母がみてくれ、大きくなって寄宿学校に入れた。こんなにもちゃんとした休暇がとれたのは三年ぶりだ。作りかけの曲を弾くと、ティーロは観光客になって演奏を楽しませて貰った。たまには立場逆転もいいと言う。ゾーニャと私でカバーバージョンをやって客に聞いて貰う。ランチ、ホテル、コンサートと三度もお世話になったと礼を言う。

4

時 場所 丘から戻ったカフェ

## 事件

二人は疲れ切っている。ジェフはこんなに忙しい思いはごめんだ。どこにいたと言う。マギーは午後をどう過ごしたのか問う。シャガーローフヒルに行って曲作りをしたと答える。

時 場所 数分間

## 事件

姉と義兄の間に波風がたつのはごめんだ。

時 場所 ぼくの部屋 もともと予備の客室

事件

カーテンが閉まらない。窓を開ける。ギターを持って出窓に座る。

時 場所 一週間後 ドアノック

事件

マギーが申し訳なさそうな曖昧な笑いをする。ジェフが映画を見たい、ギターの音でゆっくりできないと言う。今重要なところと怒る。

ジェフは仕事がある。ぼくにもある。マギーはジェフは自分の仕事とあなたの仕事と同じレベルにあるなんて受け入れない。言い争うつもりはない、気が向いたら下りてきて一緒にテレビでも見ようと言う。ジェフはぼくの邪魔をして来た。マギーは一度もぼくの歌を聞きたいと言ったことはない。

時 場所 マットレス

事件

ギターを置く。倒れこむ。疲れたというより、忙しい季節に合わせておびき寄せられた。ロンドンに戻るか。

時 場所 翌朝

事件

朝食の準備が終わってから下りて行った。二人は昼食には手伝ってくれると思っている。

時 場所 隅のテーブル

事件

朝食をとり、部屋に戻る。

時 場所 裏口

事件

ギターを持って抜け出した。

時 場所 暑い日 ベンチ

事件

ゾーニャと並んで座る。ティーロは遠方に見える。彼女は言い争いをした、民宿、朝食、丘と何一つ意見が合わない、もう終わりだと言う。また曲を書くのか、書き終えたら何か計画があるのか尋ねる。若い頃腹が立たなかったが、今は怒ってばかりだ、宿に帰って待つと言う。

ティーロなら、ロンドンへ行け、バンドを作れ、成功すると言う。あの人の生き方だ。人は落胆の連続が現実だ。あなたはティーロに似ている。ティーロは坂を上っていった。ぼくは歌のことを考えようと自分に命じた。

## 2 舞台

ビートルズ（一九六〇年改名～七〇年解散）、カーペンターズ（一九六九年初アルバム～八十三年カレン死去）、アバ（七十二年結成～八十二年停止）のヒット曲が歌われた頃。ロ

ンドンとモーバンヒルズに展開する。

### 3 人物

ぼく 両親 フレザー ジェフ マギー ティーロ ゴフィー

ぼくはモーバンヒルズから数マイルの所にあるパーショで育った。この辺の丘には両親に連れられてよくハイキングに来た。子供の頃両親は離婚した。ここは閉所恐怖を感じさせた。

ロンドンから戻った夏、ここを美しい所と感じた。自分はこの土地の人間で、ここが故郷と実感した。モーバンヒルズはぼくの故郷だ。故郷の思い出がテーマになっている。

子供の頃両親が離婚し、子供のぼくと姉は誰かに育てられた。家族の愛もなく回りの人の冷たい中で成長した。やがて姉はカフェの経営者ジェフと結婚する。ぼくは大学に進むが、経済的に窮迫し退学する。元同級生は会うとやめてからどうしてると、両親の旧友は今何をしていると質問攻めにする。子供の頃いじめに合い、成長して軋轢の中に生きる。

ぼくはアコースティックギターを弾いて歌っている。ギターは気に入られ、ボーカルはよくはもっていると評価されている。が、オーディションでは受け入れられない。エレキギターでない、アンプ等がない、移動の手段がないからだ。貧しいぼくにそんなものはない。

ぼくはアコースティックギターを弾く、そして自分の声で歌う。これがぼくの音楽活動だ。最低限出来る自己肯定だ。

夏、モーバンヒルズの姉夫婦のカフェで過ごす。手伝いをし、部屋を与えられ食事を提供される。給料は出ない。カフェは貧しくぼくの生活は苦しい。ここでもぎりぎりの生活だ。

カフェにミセス・フレイザーが現れる。パーショの学校でぼくの先生の一人だった。ぼくを最初から嫌っていた。十一才のぼくは抵抗ができなかった。答えられない質問をし、立たせ、笑いものにした。十四才の時、トラビス先生が赴任してくる。激しく叱りつけ問題児であることを印象づけた。ぼくは問題児で目をつけられていた。時にフレイザーのいじめはひどかった。

彼女はカフェに来た時、ぼくを覚えていた。そして、厭味を言って帰った。昔を思い出し今またいじめた。ぼくは憎しみがよみがえった。フレザーはぼくを憎み、嫌い、いじめた。ぼくは問題児だったかも知れない。彼女は何十年もぼくを憎み続けた。忘れなかった。思い出すとまたいじめた。執念深く憎しみを抱いていた。

フレイザーは四十数年間連れ添った夫が秘書と駆け落ちした。夫もぼくのように辛い思いに耐えていたのかも知れない。愛人が出来フレイザーから逃げ出したのかも知れない。

ぼくは二人の観光客にこの民宿を紹介する。妻がフレイザーの好敵手になると思い故意にそうした。仕返しをしようとした。マギーに強い態度に出た女とフレイザーを対決させる、ぼくはこの後このことを後悔するが、二人は民宿を快適と受けとめる。

二人はヨーロッパを演奏旅行している。デュエットで歌い演奏する。聴衆の喜びそうな曲を演奏する。二人はぼくの歌を聞きすばらしいと評価する。プロが言うのだからぼくには才能がある。ロンドンの仲間は実力もなく嫉妬から否定した。評価できる力はなかった。

ティーロは常識家で現実を受け入れる。肯定的な態度をとる。ゾーニャは些細なことにこだわり指摘する。無愛想だ。すべて否定的だ。

民宿について、朝食について、丘について二人は何一つ意見が合わない。ぼくがロンドンへ行ってバンドを作りたいと言うと、ゾーニャは、ティーロならすすめ、成功すると言う。

ゾーニャは人生は落胆の連続が現実だと主張する。ティーロはトレッキングに励む。ゾーニャは座っている。一緒にハイキングしない。

マギーは土地の人で、ここで生きていかなければならない。人の悪口もほどほどにしかしない。夫とぼくの間で立って辛い思いをする。客のわがままにも愛想よく対応する。

忙しい時に抜け出すとぼくをジェフは批判する。二階のギターをうるさがる。

ぼくは置いてもらっているが考えは通す。マギーは一度も歌を聞きたいと言ったことがない。二人は音楽に関心がない。

ぼくの両親はぼくが子供の頃、離婚する。マギーとぼくの生活は誰がみたのか？ぼくは貧しく生活に困る。大学も中退する。子供の頃から問題であったかも知れない。フレーザーはそういう子をいじめた。

ティーラとゾフィは演奏旅行で生活をたてる。好きなことをして生活する。満足している。息子のペーターは成長過程でいつも二人のリハーサルを聞かされ拒否する。旅行中祖父母に見て貰う。寄宿舎学校に入れ勉強させるのも祖父母の力によった。二人に費用は払えなかった。両親がいてもいつもいない両親は両親ではない。ペーターは両親を拒絶する。連絡しても返信しない。演奏会にも行かない。

マギーとジェフはぼくを間に対立する。ぼくを批判し、ぼくも従わない。やがてロンドンに帰る。

ぼくはロンドンで、生活も音楽も思うようにいかない。故郷モールバンヒルズに帰り、その自然に改めて感動し、ここは故郷と思う。自分の育ったところ、自分の拠り所と思う。

ギターを弾くとジェフとマギーに嫌われ受け入れられなかった。ティーラとゾーニャに評価された。音楽に関心のない人と素晴らしいと思っている人の違いだ。

故郷の自然に触れ感動し、曲を作る。故郷が曲を生ませる。生活するところではない。曲を作るところだ。

ティーロもアルプスを背景に演奏し感動させた。アルプスに訴えた。モールバンヒルズで円滑な関係が築けなかった。グループに排除された曲を拒否された。

モールバンヒルズでその風景に向き合って曲を作った。かつて両親が離婚した土地、先生にいじめられ、級友に笑われた。今、そこはぼくの故郷でぼくはこの土地の人間だ。過去の不幸だった、憎悪した人間関係を払拭し、自分の中で再生した土地に向き合う。過去の不運を乗り越える。新しい故郷で新しい歌のアイデアが生まれる。ロンドンに帰り歌の世界に生きる。

## 夜想曲

### 1 構成

行間を開けた箇所が十三箇所あるので1～14段として扱う。

1

時 場所 二日前まで

事件

おれはリンディ・ガードナーのお隣さんだった。

時 場所 安普請のアパート

事件

クロゼットを改造した部屋で練習した。俺はサクスのジャズ奏者だ。ちょい役にテナーを吹き、バンドから声がかかると出演する。ブラッドリー・ステューブソンは長年の友人でマネージャーだ。

時 場所 高級ホテルの一室

事件

おれと同じく二日前まで顔を包帯でぐるぐる巻きにしたリンディが隣の部屋にいた。彼女は近くに大きな自宅があり、そこにヘルパーを雇い、ポリス医師の許可をもらって帰って行った。自宅を張っているカメラマンや芸能記者を避けるためだ。

時 場所 醜男

事件

おれは才能はあるのに、醜男でメジャーになれないとブラッドリーが主張し、スターでも億万長者でもないのにここで顔を変えて貰う。

妻のヘレンは少しいじることを考えてもいいと言う。おれはミュージシャンは最高の技術が最高の音楽を奏でるものだと思っている。なんで美容整形が必要かと反対する。

時 場所 シアトルから電話

事件

ヘレンからクリス・ブレンダガスと結婚すると電話が来る。彼女はブレンダガスに憧れていた。捨てていくのは気が咎める。彼はレストランチェーンを展開し繁盛している。お金を出すから、街一番の美容整形外科に顔を整形して貰え、顔を直せば怖いものはないとヘレンは言った。二、三週間痛いのを我慢すればいい。

時 場所 次の日 ブラッドリーの事務所

事件

彼はこの機会を逃がすなとすすめる。

時 場所 アパート 一時間後

事件

ブラッドリーは、ヘレンは彼を愛してはいない、整形費用を払わせるのが目的で終われば戻って来ると言う。

時 場所 その後の数週間

事件

仕事が少なくなったのに気付いた。電話するとブラッドリーは、自ら助けざるものを助くるは神でも難しいと言う。食っていかなければならない。おれの音楽が多くの人々の耳に届く。バンドを持ちたい。

時 場所 ヘレンの申し出から六週間

事件

考え直してみると言う、ブラッドリーは、猛烈に動く。交渉事を全部引き受ける。ポリス医師の患者一人がキャンセルするとすぐその後に入れる。

時 場所 今日午後三時三十分 ハリウッドヒルズの大きな屋敷

事件

ブラッドリーは、車に乗せ連れて行く。おれは麻酔をかけられる。

時 場所 二日後 ビバリーヒルズのホテル

事件

夜陰に乗じて裏から入り、特別フロアまで車椅子で運ばれた。ホテル本体から完全に切り離されている。

1

時 場所 最初の一週間

事件

顔は痛み、麻酔のせいで吐気がし、眠れない。ポリス医師は大勢の映画スターが俳優生命を託しに来る男で意気軒高だ。

時 場所 部屋暗い

事件

時間の感覚がない。おれこそが彼の最高傑作になる。本格的なジャズミュージシャンに必要な顔にしてくれるだろう。

時 場所 二週目

事件

看護師の 그레이シーはブランドを半分まで上げる。部屋の中を歩くことが許され、CDを聞いた。

時 場所 化粧台

事件

鏡の中のおれは、ぐるぐる巻きにした包帯の二つの穴からじっとにらみ返した。

時 場所 お隣さん

事件

그레이シーは、リンディが・ガードナーが隣にいると教えた。リンディは才能がなく、演技ができなく、音楽の才能がないが、なぜか有名だ。テレビ局や雑誌が契約の争奪戦をくり

広げている。理由は、恋愛、結婚、離婚で騒ぐからだ。自伝のサイン会を開き、レギュラー番組にまで出演する。

隣の部屋にいてポリス医師の整形手術から回復しつつある。

時 場所 先週 今

事件

おれはジャズミュージシャンだった。今、リンディの同類になりたかった。あとに続こうとセレブの世界にはい上がろうともがいている情けない、ペテン師だ。

時 場所 その後数日間

事件

顔の痛み、痒みに悩み、暑さ、閉所恐怖と闘わねばならない。サクスを今吹くと 顔が崩れる。顔の筋肉が圧力に耐えられるまでまだ何週間かかかる。

時 場所 一日をやり過ごす方法

事件

CDを聞く、楽譜を眺め、アドリブを口ずさむ。

時 場所 二週間の終わり

事件

回復し始めた。 그레이シーが封筒を手渡した。五時に来てくれ、リンディ・ガードナーとある。

退屈しきっていたからだ。これを読んでリンディについての思いは雲散霧消し、興奮が湧き上がった。五時に行くことにする。

時 場所 リンディの部屋

事件

リンディはおれより包帯の量が多かった。テレビで見聞きしているままの声だ。あなたはミュージシャン、有望な人、リラックスして仲間の一人として扱うと言う。

時 場所 部屋 かなり大きい

事件

メイドが水とコーヒーを一杯ずつ持ってくる。おれはストローで飲む。辛いことと聞くのでサクスを吹けないことと答える。美容整形を受けた友人の話をするが、名前はセレブかその配偶者だ。サクス奏者なんだ、素敵な楽器と言う。三十九才と言うと、若いけどずっと若いと思っていた。

ミュージシャンがいると言うからあまり聞かない名前と言うと、これからの人だからと言った。おれが新進気鋭だったと言う。

時 場所 キャビネット

事件

このサクスは完璧だと言う。これはトニー・ガードナーだ。リンディは恍惚状態に体を揺らす。音楽にすっかり溶け込んでいて、楽しそうだ。この女はトニー・ガードナーと離婚



したばかりだ。すごいでしょ、言ったことの意味が分かったと笑う。歌っているのは思っている通りの人、夫でないから聞いていけないことはない。

あなたの演奏した曲は古いのか、聞いてみたいと言う。有名人で他の有名人にしか興味を持ってはけないと思っている人は多い。私にとっては誰もがいずれ友達になれる人だ。

おれはくたびれたと帰る。また来て CD を持ってきて、チェスをしよう、チェスセットのすごいのある。

4時 場所 部屋

事件

おれは戻る。ブラッドリーに電話する。居心地が悪い。別のホテルにしてくれと言うとどこが気に食わんと聞く。リンディ・ガードナーとのことを話すと、無礼はしていないかこれは絶好のチャンスだと言う。

CD を持って来いと言う、これからの二週間つき合う気はない、他に移してくれと頼む。

包帯も取れないうちからえエンジン全開だ。リンディは重要人物だ、トニーとは離婚した。顔が新しくなってリンディが後押しする。一気にメジャーだ。無礼にするなど念を押す。

5

時 場所 部屋

事件

おれは言いたいだけ言うと気分がよくなった。

時 場所 朝食後

事件

ポリス医師が看護婦二人と来た。回復ぶりに満足した。

時 場所 十一時頃

事件

ドラマーのリーのマネージャーは同じブラッドリーだ。様子を見に来た。昔のみんなが消えて悲しい。

時 場所 年間最優秀ジャズミュージシャン

事件

リーはジェイク・アーベルが授賞する、誰も想像しなかったと言う。明日ホテルのボールルームで行われる。

6

時 場所 昼食後一時間 電話

事件

リンディから駒が並んでいるとある。簡単に押し切られた。CD のうちリンディをうならせるものを決めなければならない。

新しいシャツに着換えドレッシングガウンをかけて隣の部屋に行く。

7

時 場所 隣の部屋 駒の並んだチェス盤

事件

リンディはドレッシングガウン姿だった。気が変になりそうになった時、建物の中を真夜中散歩する。日中は囚人同然、夜中は完全な自由人だ。貴賓室を見つけた。クイーン取る。見えなかった？

おしゃべりで気が散ったはずだから見なかったことにしてあげる。結婚してるの？ええここは安くないのにどう思ってる？かまわんそうです。お見舞いに来るの？一度も来ない。今朝一人昔の仕事仲間が来た。ジェイク・マーベルの授賞の件だ。おれはジェイクには、才能はないと思っている。

時 場所 CD

事件

手渡して右から二番目と言う。かわいいと言ったが興奮のかけらもなく、哀れみの響きがあった。

時 場所 九番トラック

事件

メンバーは一流で野心を持っていた。誘われる演奏の一つだ。リンディの心に響くと信じた。

時 場所 最初の一、二分

事件

楽しそうに聞いた。体を揺らした。リズムが消え棒立ちになった。ソファに座り込むしぐさは期待を抱かせるものではなかった。

時 場所 曲終わる

事件

おれはプレーヤーを止めた。素敵は社交辞令に聞こえた。お気に召さなかったと言うとあんなそんなと不機嫌そうだった。何か特別な思いがあるか聞くと包帯の背後に怒りがある感じがした。あなたの演奏はすてき、これぞプロという演奏と言う。おれは CD を取り出した。何を怒っているのと言う声は依然よそよそしく冷たかった。CD をケースに戻し帰った。

8

時 場所 手術後

事件

睡眠時間はめっちゃめっちゃだった。リンディから電話でドアの下から光が見えたので眠れずにいると思ってと言う。あげたい物があると言う。興味津々貰いに行く。いまず説明しておきたいと言う。自分の音楽をけなされたと思って怒ったのだろう、正反対だ、来てくれ、全部説明する、もう一度あの CD を持ってきてくれ。

9

時 場所 リンディの部屋

## 事件

ドアを開けて CD を取り中に引き入れた真夜中の散策に行ってみないと言うと、朝まで待たされたらどうにかなってしまうと言う。びっくりさせることがある、あなたの曲をもう一度聞きたいと言う。

時 場所 《ニアネス・オブ・ユー》大音響

## 事件

バスを過ぎてても止まらない。我を忘れて溶け込んでいる。ソファに戻って、崇高、素晴らしいミュージシャンだと言う。トニーにはよく叱られた。才能のある人に会おうと本能的にあなたにやってみたいにってしまう、たぶん嫉妬だ。

時 場所 噂の部屋

## 事件

贈呈式をします、年間最優秀ジャズミュージシャン賞はあなたにふさわしいと光る真鍮を渡す。本物のトロフィーか開くと本物だ、偽物のがらくたをあげてどうするのかと答える。一番の泥棒と言うと、あの男は下手、へボ、あなたは天才、どっちが泥棒か？

お気持ちも栄誉も全部頂く、本物ならその場に戻ろうと言うとなくたって別のものを用意すればいいと言う。スキャンダルになる、あなたの視聴者に何と言うかと言うとその通りかもしれないと答える。

10

時 場所 廊下 暗い空間 ボールホール ステージ 授賞式会場

## 事件

リンディは愛着が増しトロフィーを胸に抱きしめた。

四、五人集まる。ジェイクがそのトロフィーを貰う。リンディは本物だって何人かいる、資格がない人ばかりではない、死に物狂いで練習してこの結果になったと反論する。

時 場所 ボールホールと平行 細長い空間 配膳室

## 事件

トレイの一つをのぞきこみ、クッキーと言った。いつもの自分に戻った。

時 場所 ドーム蓋 ローストターキー

## 事件

リンディは自分が貰わないと気がすまない、自分は先頭に立って当たり前と思っているところが嫌なところだ。あなたほど才能がなくてがんばりだけで上を目指す人だっているのにそれが分からないと言う。おれだってやっている、賞賛されるのはジェイクやあなたみたいな人だと反論する。

時 場所 スイッチの音

## 事件

警官と警備員の二人の男が現れて立ち入り禁止だ、一つ二つ物がなくなったらしいと言う。

リンディは眠れなくてちょっと散歩に出たと言う。警官は喋り続け、警備員は隠し持っているか調べようとしている。リンディがこんな所まで食べ物探しに来るなんて悪ふざけ過ぎたと言うと警官はルームサービスは二十四時間営業だと言う。

1 1

時 場所 ボールルーム

事件

悠々と引き返した。えれべーたーにころがりこんだ。リンディはいい所に連れて行くと手に入れたカードで立ち入り禁止のドアを開ける。

時 場所 新しい貴賓室

事件

あのトロフィーはどうなったかと尋ねると、あなたが貰うべきもので、七面鳥の中に隠した、九才の時姉の玉を七面鳥の中に隠したと言う。二人眠る。

1 2

時 場所 夜明け

事件

目が覚め、リンディを揺り起こした。トロフィーは誰かが見つける。見つけた人は報告する。警官が聞いたらおれ達を疑う。七面鳥の中で見つかり犯罪者になる。腹から取り出さないと。

時 場所 ボールホール 配膳室

事件

戻ることが出来入った。

時 場所 皿とナプキン

事件

食べ物はどこへ移されたか？

時 場所 部屋の奥

事件

暗闇に踏み込む

時 場所 銀色のドーム蓋二つ

事件

二つ目にあった。引っ張り出す。

時 場所 ステージの上

事件

携帯電話の男はそっちでやってもってきてくれと言う。男はおれを見続け、おれは男を見つづけた。男は頭に包帯を巻いている。チキンを握り落そうとしていると言う。

おれは右手とトロフィーを腹から抜き取らねばならない。トロフィーを両手に持ちチキンを落とした。

13

時 場所 フロア

事件

どうやって戻ったか、よく覚えていない。

時 場所 ルームサービスのトレイ

事件

夕食の食べ残しのよこにトロフィーを置いて来た。

時 場所 リンディの部屋

事件

リンディは包帯のとれるのを楽しみじゃないと言うとそれなりにと答える。これは三回目、きっと自分を見違える。ミュージシャン人生が離陸すると言う。雑誌にもテレビにも引っ張りだこだ。わたしはあなたのチームの一員で便宜を図ってくれそうな人達に話す。

最初から無理だったがブラッドリーの口車に乗せられた。リンディは包帯が取れたって二十年前に戻れるかどうかわからない、わたしは出て行ってやってみると言う。

14

時 場所 その朝以後

事件

リンディと顔を合わせたことはない。電話を待っていたが来なかった。

時 場所 隣の部屋

事件

トニー・ガードナーのレコードが大音量で何曲も何曲も聞こえて来た。

時 場所 四日目

事件

会って歓迎してくれたが後押しには触れなかった。

時 場所 二日前の晩 ノック

事件

チェックアウトすると言う。ボイス医師が自宅で包帯を取ることを許可した。

時 場所 あの朝 逃走劇の後

事件

両頬にキスした時が別れだった。

時 場所 リンディ・ガードナーの隣 終わり

事件

あと六日で包帯が取れる。

時 場所 ヘレンの見舞いの電話

事件

ブレンダガストがよろしくと言っていた。

時 場所 リンディ 頭を切り替える必要

事件

人生は本当に一人の人間を愛することより大きいのか、これは人生の転機か、おれはメジャーになれるのか、リンディは正しいのか？

## 2 舞台

ビバリーヒルズのホテルに、美容整形外科の手術を受け二、三週間滞在する。二〇〇九年頃。

## 3 人物

スティーブとリンディ

スティーブはジャズミュージシャンでサクスを吹いている。ちょい役で声がかかると出て行く。プライドは高く、才能は他人の二倍あると思っている。貧しく小さな部屋に住んでいる。

妻ヘレンは音色は繊細、構想力があり、テクニックに優れていると思うが、醜男でメジャーデビューできないと思っている。友人ブレンダガストに交渉してもらい美容整形をさせようとする。スティーブは最高の技術、最高の音楽が目標で、美容整形など不要と思っている。マネージャーで友人のブラッドリーは美容整形することに賛成する。

仕事は減り、生活は苦しくなる。音楽が多くの人々の耳に届くようにしなければならない。今のままではダメだ。迷い続けた末整形を受け入れる。

ブラッドリーは動き回り手を尽くす。有名なポリス医師の患者一人がドタキャンするとその穴埋めにスティーブを入れる。

ビバリーヒルズホテルでポリス医師の手術するタイプはセレブ用で、スティーブにブレンダガストは大金をはたいた。

最初の一週間顔が痛み麻酔のせいで吐気がし眠れない。終われば本格的ミュージシャンに必要な顔になる。

二週間部屋の中を歩き CD を聞く。鏡の中の奇怪なモンスターを見る。隣にリンディ・ガードナーがいる。才能はなく演技も下手音楽性なしで、有名だ。スキャンダルを起こし人気を集めている。スティーブはリンディの後に続こう、セレブの世界にはい上がろうと思う。

リンディは三度目の手術から回復しつつある。退屈しのぎにスティーブを呼ぶ。夫と同じサクソ奏者、名もない音楽家、相手として都合がよかった。スティーブは有名なリンディに期待する。上の者と思って緊張する。

彼女はリラックスして、仲間の一人として接するように指示する。明らかに有名人として下の者を見る。相手になってやる。相手は自分を敬いへつらっている。申し分ない相手を手に入れた。

彼女は美容整形した友人について話す。出る人はセレブだ。話す自分の立場を示す。

サクソという楽器をほめ、若いサクソ奏者は年配のプロの話聞くべきだと言う。夫を意識して言っている。

スティーブを若いと思い、両親がサックス奏者として成功するため、大金を出してくれたと思う。スティーブは名を知られていないのでリンディは聞かない名前と遠回しに言う。無名のミュージシャンは大勢いると軽く見ている。

離婚した夫トミー・ガードナーの CD をかけ恍惚状態になる。すごい曲と称える。自分は有名で、有名な夫を持ち出して自慢する。スティーブがよかったと言うと、耳は正確だとほめる。自意識が強い、うぬぼれが強い。元夫を称えて自慢する。自分を高めて示す。サックス奏者でスティーブのレベルをみるため CD を持って来いと言う。

元夫が詮索好きと言ったと取り上げ、誰もが友達になれるので、誰とも普通に話をする。それを詮索好きとは言わない。リンディは元夫が自分を批判したことを取り上げ、反論し自分を擁護し、スティーブに訴える。

スティーブはブラッドリーにリンディのことを電話で話す。リンディが自慢し、それに相槌を打つ様子の特権階級地獄と言う。ホテルを移してほしい。ブラッドリーはこの件を絶交チャンスと言う。無礼をしてはいけないと注意する。リンディの機嫌を損ねず、取り入れと言う。リンディが大物でそのコネにたよってスティーブがはい上がることを期待する。ドラマーのリーが様子を見に来る。ジェイクが賞をこのホテルで明日授賞すると言う。リーは授賞に納得しない。リンディは電話でチェスに誘う。気が変になりそうになった時建物の中を夜中の散歩する。いろいろな所に行く。ホテル全体の構造を知る。カードを使いどの部屋にも入ることができる。

見舞いに来るか尋ねる。リンディのところには誰も来ない。関係者以外誰とも会えない。一人で寂しく、スティーブに目をつけ呼んだ。

スティーブは CD を手渡す。リンディは楽しそうに聞いて体を揺らした。すぐにリズムが消え棒立ちになった。体をこわばらせ不自然な姿勢のまま素敵と社交辞令を言う。スティーブは CD を取り出しケースにしまい出て行く。

リンディは評価しなかった。スティーブは選んだ CD を持ってきて期待したが、期待はされなかった。非難したジェイクと同じだ。

手術後の睡眠時間はめっちゃめっちゃだ。リンディからドアの方から光が見え眠れずにいると思って来訪を誘う。

CD を大音響でかけ、すばらしいと称える。前回の態度を才能のある人に出会うと認めない態度を取る、嫉妬からだと弁明する。

リンディは小像を渡す。ふさわしい人と言う。真夜中の散歩に見つけて持ってきた小像だ。

スティーブは他の受賞だってみんなへぼだ、ジェイクを選んだ審査員だと非難する。

リンディは本物だって何人かいる。死に物狂いで練習してこの結果になったと反論する。自分が貰えないと気がすまない、自分は偉いと思っている人もいると言う。二人は小像を戻しに行く。

その朝以後、顔を合わせない。スティーブは電話を待っている。が、来なかった。隣の部

屋からトニー・ガードナーのレコードが大音量で何曲も何曲も聞こえた。リンディは元夫を評価し、スティーブを評価しない。決別の大量だ。

リンディはチェックアウトし自宅へ帰る。

スティーブを後押しすることはない。才能を認めない。リンディは孤独な入院生活を紛らそうと夜の散歩に出る。それでは不満で音楽を聞く。力量のない、話しやすいスティーブと接し寂しさを紛らわす。

スティーブは努力しても目が出ない、浮けがいいやつが出て行く、コネで成功すると思う。リンディはスキャンダルで有名になっていると思われるが、努力して目が出ると思えそうしている。

リンディとスティーブは美容整形手術をした患者同士だ。その期間だけ状況に応じてだけ交渉する。見舞客も殆どなく、二人だけの交流をする。退院すれば終わる。

関係に発展もなく継続もない。一時の交流は消滅する。共通するものは夜想曲だ。元夫のサクスはスティーブのサクスにまさる。彼の曲を聞いているリンディにスティーブの曲は価値がない。

スティーブは自分の音楽を追及するというのではなく、他人の音楽を非難する。リンディは元夫の音楽を理解し、本物と思っている。スティーブの曲がどういうものか分かる。リンディはスティーブを後押ししない。

スティーブは周りの者の意見に左右され美容整形をする。音楽と関係ないと思っても流される。顔のよしあしはあるかも知れないがそこにだけ目を向けるべきではない。人気や評価にだけ目を向けるべきではない。仲間の演奏を非難しても、自分の演奏に確信を持たない限り目は出ない。



チェリスト

## 1 構成

行間を開けた箇所が9箇所あるので1～10段として扱う。

1

時 場所 《ゴッドファーザー》 秋風 広場

事件

演奏していてティボールを見つけた。彼は老けていた。

時 場所 七年前 暑さ アドリア海に面した町

事件

戸外での演奏は四ヶ月以上続いた。ドイツ人やオーストリア人が大勢やって来た。ロシア人が目立ち始めた。

時 場所 ロンドン 王立音楽院 ウィーン二年間 オレグ・ペトロビッチ指導

事件

ティボールの経歴だ。彼はハンガリー人だ。ヨーロッパ各地を転々としてコンサート活動が続けていた。

時 場所 その夏 町の芸術文化祭

事件

ティボールは招かれ、アパートを夏の間無料で借りられた。

時 場所 カフェの奥の部屋

事件

私達全員が集まりティボールの演奏を聞いた。オーディションだった。彼はやる気に満ちて臨んだ。一夏の間態度がでかくなった。

2

時 場所 その日 広場

事件

ティボールは隣のテーブルでいろいろなフルーツジュースを注文する女に気がついた。

時 場所 サンロレンツォ協会

事件

女は協会のリサイタルを開いたと言う。最近の二ヶ月間ではあれがただ一度のリサイタルだと言う。

リサイタルは大したものと言うので、二十四人だけと答える。音楽人生のこの段階では人数は関係ない。可能性がある、誰か現れて聞いてくれるのを待つことだと言う。

ユロイズ・ママーマックと名のる。ティボールは旧共産国で育ったので名前は分からないと言う。チェリストに上手に美しく演奏してほしい。

時 場所 市立博物館のロビー

事件

もう少しで走り寄って怒鳴りつけるところだったと言う。火曜日にも同じ衝動にかられたか聞くと、あなたは道を踏み外しかけている、正しい道に戻す手助けをしてあげたいと答える。オレグ・ペトロビッチの教えを受けていると言うと、それなりの音楽家だったと答える。怒りで口もきけなくなり、女をにらみつけた。手助けしたい、エクセルシオールホテルにいると言う。

3

時 場所 次の二日間

事件

ペトロビッチを誇らしく思い、名前を出せば効果があり注目され敬愛をもって迎えられる。権威として振りかざしたのではないか。

時 場所 三日目

事件

受話器に名前を聞くのを忘れた、話し合いたい、一時間後にチェロを持って来いと言う。

時 場所 エクセルシオールホテル 午後盛り

事件

くだきたいでたちで、弾いてみてと言う。チェロケースを開けた。

時 場所 最初の曲

事件

一言も発しない。

時 場所 二曲目 三曲目 一時間

事件

音にはこれまでにない深みと含蓄があった。今の状況が分かった。もう一度と言われ立ち去りたい衝動にかられた。再び弾き始めた。数小節で止められた。再び立ち去ろうとした。五分我慢しようと思う。あともう少しいよう。ティボールが弾き女がしゃべる。突然何かが見えた。

時 場所 ホテル 広場 カフェ

事件

昂揚感のうちにホイップクリームを乗せたアーモンドケーキを食べた。

4

時 場所 毎日 午後 ホテル

事件

通った。批評は辛辣になった。新しエネルギーと希望に満たされてアパートに戻った。女の滞在が終わることが恐怖になり安眠を妨げられた。レッスンの効果は疑いない。

時 場所 ある日

事件

レッスンを終わると曲の準備を始め批評を予想した。

時 場所 ある日 ホテルの部屋

事件

チェロはどこにもない。大家がこれほど長い間楽器に触れないことなどあるだろうか。

5

時 場所 レッスン進む カフェ移動

事件

ティボールがウィーンで親しくしていた少女のことを尋ねた。愛ではなく好意だった。ティボールの演奏は愛の記憶のようだ。一般には喜びの楽章として弾くと言う。

時 場所 ペトロビッチのもと二年間

事件

師に個人的質問はしなかった。女は言葉の端々にオレゴン州ポートランド在住、三年前ボストンからここへ、パリは嫌いと言っていた。よく笑うようになった。

時 場所 ある日の午後

事件

結婚を望む男、ピーター・ヘンダーソン、オレゴン州ゴルフ用品の販売業、新設、六才上、幼い子二人、新婚成立。女は隠れている。

ティボールは居心地の悪さを感じる事がなくなった。女も受け入れられていることが分かっていた。

6

時 場所 ある日の午後

事件

一曲弾き終わったところ、末尾近くの八小節を弾き直せといわれ弾き直す。女の顔の皺は消えない。わたしたちのように聞こえないという。もう一度弾いた。首が横に振られた。なぜ弾いてみせないのかと思っている、言葉で教え、ぼくが弾く、そうでないと真似になると答える。そのとおりと言う。

時 場所 次の数分間

事件

終尾句と終過句の違いについて話し続けた。問題の数小節を弾くとにこりとしうなずいた。このやりとりの後、二人の午後には影のようなものがまとわりつくようになった。

時 場所 ある日 広場

事件

ティボールには前の所有者にアメリカ製ジーンズを数本とチェロを交換したと話した。女はいい楽器いい音色をしていると言う。

7

時 場所 九月終わり アムステルダム 五つ星ホテル 室内楽グループ

事件

チェリストの空きができた。ジャンカルロはティボールのそっけない返事に怒る。ティボールは三日以内に返事すると答える。エルネストはあの女のせいで傲慢になった、アムステルダムでももめると言った。

8

時 場所 ホテル

事件

ティボールはオーディションのことを話していない、同意したことが裏切りに思っていた。今度も電話の内容を相談していない。

時 場所 異常に暑い午後 ホテル

事件

弾き始めると三分たたないうちにやめさせる。何かおかしい、隠そうとしてもだめだと言う。ティボールは大切な人でわたしにだまされたと考えるなら耐えられない。大家は特別な才能の持ち主で、二人は絶対身につかない何かを持って生れついた。初めて演奏を聞いた時、それがあることが分かった。

私の中にそれを認めた筈、百人のチェロリストの中に九十九人は覆いの下に何も無い、わたしたちは特別、助け合わなければならない。

母は私の才能を見抜いた。四才、七才、十一才の時の移動はみんなだめ、自分の才能を守らなければならない。破壊されないようにあなたの才能は貴重だ。

子供の頃にはチェロを弾いたか聞くと、十一才から触れていない、才能を傷つけないことが最優先、今四十一才で、教師はプロで口上手だ。二回弾く。早く終わって、町を二、三日離れると言う。

9

時 場所 一週間の旅

事件

エロイズが去らなかつたか知りたかつた。

時 場所 午後 エクセルシオール

事件

エロイズは寂しい思いをしていた。二人の間の緊張は消え、よい雰囲気になった。一曲弾き終わると演奏の批判をした。厳しい批判だった。憤る気持ちはなかつた。

時 場所 次の日 その次の日

事件

同じだった。これだけうまく演奏できたことはないと思った。二人は言葉のことだけ話し合った。

時 場所 四日目

事件

ピーターに探し当てられたと言う。ピーターは大柄だ。明日の大スター、再開を君にも祝

って貰う。ハンガリーで成立するのはどういうことだ。西側に来た時ショックだったか。エロイーズは感受性豊かかと言う。

探し当てて結婚の資格ができた。数日のうちにアメリカへ行く。結婚すると言う。ティボールはアムステルダムに行って室内楽のグループに入ると言うとその客は幸せだ、きっとびっくりする。

10

時 場所 町

事件

ティボールはすぐ町を離れた。仕事の事友情に感動した。エルネストは夏中天才と持ち上げられたが、ホテルの仕事では辛いだろうと言った。

時 場所 七年前のごと

事件

当初のメンバーはフェビアと私だけだ。あの若者を見かけた。

2 舞台

二〇〇九年頃の夏、ベネチアの広場に展開する。

3 人物

ティボールとエロイーズ・マコーマック

ティボールはハンガリー人で民主化した後ベネチアにやって来た。アメリカ製ジーンズ数本とチェロを交換した。チェロリストだ。やせた若者で時代遅れの眼鏡をかけている。ロンドンの王立音楽院で学び、ウィーンで二年間オレグ・ペトロビッチの指導を受けた。

ウィーンを離れた後、ヨーロッパ各地を転々とし、コンサート活動をしていた。やがて客の入りが悪くコンサートはキャンセルされるようになり、嫌った音楽でもやらざるを得なくなる。

夏、町で芸術文化祭が催され招かれアパートを夏の間無料で借りられることになり、やってきた。

エロイーズはアメリカ合衆国オレゴン州ポートランドに住んでいる。三年前ボストンから移ってきた。母はチェロの才能を見抜き、教師を探して来てくれた。教師は四才の時も七才の時も十一才の時もみなだめだった。母には分からなくてもエロイーズには本能的に分かった。本能を守らなければならないと思った。教師に破壊されないように本能を守らなければならない。十一才からチェロを弾いていない。才能を傷つけないことを最優先にした。

二人は広場のカフェで出会う。エロイーズがサンロレンツォ教会でリサイタルをしたのを聞いたと声をかける。

エロイーズはリサイタルを称える。音楽人生のこの段階では人数は関係ない。可能性がある、誰かが現れ聞いてくれるのを待つことだ。訓練を積むだけの同席の音楽家ではない。チェロリストに上手に美しく演奏してほしい。間違った演奏が多すぎる。市立博物館のロビー

の演奏を聞いて怒鳴るところだった。

ティボールはじぶんの演奏にも同じ行動に駆られたか聞く。彼女は駆られた、道を踏み外しかけている、正しい道に戻す手助けをしてあげると言う。

ティボールはオレグ・ペトロビッチの教えを受けたと自慢する。エロイーズはそれなりの演奏家で、相当な人間に見えていると軽くあしらう。ティボールは尊敬している師を否定され怒りを表す。怒りは少し収まりむしろ共鳴する。エロイーズは怒っているが手助けしたい、エクセルシオールにいると告げる。

ティボールは思い返し、ペトロビッチの名を出すと効果があり、それに憧れていたと反省する。名前を権威としてすがってきたのだ。動揺したのは威力がない可能性に気づいたからだ。名声に酔い、頼り、自分を飾ってきた。

ティボールは一曲二曲三曲と弾いた。音はこれまでにない深みと新しい含蓄があった。期待に答えられたのだと思った。

エロイーズは今の状況が分かった。第一楽章だけもう一度弾けと言う。ティボールはたちさりたい衝動に駆られた。が、我慢して再び弾き始めた。数小節で止められ、再び立ち去ることを考えたがもう少しようと弾き、エロイーズが喋った。その言葉の意味することを演奏に取り入れようとした時、効果が表われて後に突然何かが見えたと語った。

それから毎日ホテルに通った。毎日新しいエネルギーと希望に満たされた。批評は辛辣になっていった。ティボールが段階を上げてエロイーズがその次の段階を要求するのでこうなった。ティボールは毎日腕を上げていった。そして、エロイーズが出て行くことに恐怖した。

レッスンの効果は上がっていった。その日のレッスンが終わると次の日のレッスンのために曲の準備を始め、批評を予想した。

ティボールは親しかったドイツ人少女のことを好意と思っていたが愛ではなかったと言う。エロイーズはラフマニノフの第三楽章を愛の記憶、喜びの思い出として弾いたと言う。チェリストは喜びの楽章として弾くと言う。ティボールは楽章を自分のものとして弾いた。

エロイーズには、ピーター・ヘンダーソンがオレゴン州にいる。隠れているエロイーズを探し出し結婚する。幼い子が二人いる男は無事に離婚し、エロイーズと結婚する。エロイーズには愛し合う男がいる。エロイーズはチェロを弾かない。言葉で指導する。言葉で正確に厳密にその内容を指示する。ティボールははその言葉を把握し音に表す。これがエロイーズの指導法だ。

見た景色を音に表す。考えたことを音に表す。これが音楽だ。音をどう表現するか、楽器を真似して出しても真似に過ぎない。形だけの音になっている。もっとはっきりした物言いとは言葉による正確な伝達のことを言う。

エロイーズは言う。大家とは特別な才能の持ち主のことだと。エロイーズは大家でティボールの演奏を聞いて受けそうだと判断した。そして指導し彼は応じた。二人は本来の特別な才能を持ち合い、ふとしたきっかけでそのことを知り合った。エロイーズはティボールにオ

能を見、発掘し発展させた。

エロイーズの母が見抜いた才能を自身破壊されないように守り、発揚させた。ティボールに同じ才能を見、壊されないように守るように教えた。エロイーズはピーターとの結婚生活に生きる。ティボールはアムステルダムに仕事を得、チェロリストとして生きる。